

博士学位請求論文概要書

漱石初期小説の研究

西田 将哉

本論文が考察の対象としているのは、『吾輩は猫である』（『ホトトギス』明治三八・一）明治三九・八）、『趣味の遺伝』（『帝国文学』、明治三九・一）、『坊っちゃん』（『ホトトギス』、明治三九・四）、『草枕』（『新小説』、明治三九・九）、『野分』（『ホトトギス』、明治四〇・一）、『虞美人草』（『朝日新聞』、明治四〇・六）一〇）、『坑夫』（『朝日新聞』、明治四一・一）四）、『三四郎』（『朝日新聞』、明治四一・九）一二）、『それから』（『朝日新聞』、明治四二・六）一〇）、『門』（『朝日新聞』、明治四三・三）一六）という夏目漱石の十編の小説である。

このうち、本論文は『吾輩は猫である』から『三四郎』までを漱石の初期小説として位置付け、一人称小説から三人称小説への転換、語り手の登場人物への敬称付け、物語中に設けられた空白という三つの視座から検討している。この三つの視座から考察したときに、『吾輩は猫である』から『三四郎』までには共通した特徴がみとめられ、『それから』、『門』にはその特徴がみとめられないことが明らかとなる。それゆえに、本論文は『吾輩は猫である』から『三四郎』までを漱石の初期小説として位置付けるのである。

本論文は、序章、第一部の第一章から第五章、第二部の第六章から第十章、終章の全十二章構成である。独立した論としても読むことができる各章を、それぞれの章で論じている小説が発表された順に配列しているが、これは初期小説を通時的な視点からも眺められるようにするためである。

以下に各章の概要を記す。

序章 一人称時代の敬称と「作者」の位置

本論文の分析の枠組みを明確にするために、『吾輩は猫である』に始まる一人称小説の展開を追い、語り手が登場人物に付ける敬称が、語り手の主観を反映し、登場人物を布置する効果があるという、一人称小説に共通する特徴を明らかにした。そして、一人称小説の特徴が、『野分』、『虞美人草』という三人称小説にも「作者」という語り手と登場人物への敬称付けとして引き継がれていることを示した。三人称小説では、「作者」という語り手と敬称の相互作用の産物として、物語解釈上重要な空白がみとめられる。『三四郎』の語り手は「作者」を自称しないが、登場人物への敬称付けと『野分』、『虞美人草』にあったのと同様の空白がみとめられることから、一人称小説以来の特徴と空白の有無によって『三四郎』と『それから』、『門』の間には初期とそれ以降を分かつ境界線を引くことができるのだと論じた。

また、本論文の構成を示すために、各章のあらましを記している。

第一部 一人称小説の展開

第一部は、『吾輩は猫である』に始まる一人称小説を考察の対象としている。漱石は『草枕』までの間、「吾輩」、「余」、「おれ」などが語る一人称小説をほぼ一貫して書き続けたが、この時期の一人称小説には、語り手が登場人物に敬称を付けて語ること、そして、この敬称が登場人物に対する語り手の共感や同情などの主観を表し、さらに敬称によって登場人物が布置されているということが共通した特徴として見出されることを明らかにした。

第一章 空虚な書斎——『吾輩は猫である』——

「吾輩」という一人称を用いる猫によって、珍野苦沙弥がどのように語られているかというに着目し、彼が一日のほとんどを過ごす書斎の意味について考察した。『吾輩は猫である』は、猫が「吾輩」というやや尊大な一人称で語るが、猫の一人称語りであることが苦沙弥の書斎について考察するうえで重要である。それは、珍野家には六畳の書斎があるが、苦沙弥の家族は彼の書斎の中での様子を知ることができず、猫だけが書斎の内部を見ることができからである。

中学教師である苦沙弥は、しばしば書斎に籠もるのだが、読書はすぐに中断され、居眠りを始めてしまう。本来、読書や研究の場としてあるはずの書斎が、その役割を忘れられ、居眠りのための空間と化していることの意味は小さくない。俳句、新体詩、謡曲などに手を出す、すべて途中で挫折してしまう苦沙弥の、何ごともものにならない性格が、読書や研究ではなく居眠りの場としての書斎を作り出しており、書斎の空虚さが苦沙弥という男の空虚さを規定してもいると論じた。

また、苦沙弥の職業である中学教師は、実業家との対比において否定的にとらえられている。そのような教師としての苦沙弥を同時代の文脈に置きなおして、書斎のあり方と関わり合わせたときに、苦沙弥の書斎という場の性格から『吾輩は猫である』を捉えなおすことが可能となった。

第二章 語り手「余」の友情と恋——『趣味の遺伝』——

「余」という一人称を用いる学者の、日露戦争で戦死した友人「浩^{こう}さん」こと河上浩一への友情を枠組みとして理解されてきた『趣味の遺伝』から、友情の物語を相対化する別の物語を取り出すことを試みた。そのために、「余」の語りから浮かび上がるさまざまな水準の葛藤、なかでも浩一への友情と、浩一の墓前で出会った女への関心の間の葛藤に注目する。

先祖の男女の好みが子孫に遺伝するという「趣味の遺伝」説も、この葛藤の中から生まれるのだが、「余」の葛藤を手がかりとして、『趣味の遺伝』が友情だけを語っているのではないことを明らかにした。

これまでも、浩一の墓前で出会う女への「余」の恋については言及されているが、それが浩一の恋の追体験や代理体験として捉えられるかぎり、『趣味の遺伝』は友情の物語から自由になることはできない。『趣味の遺伝』を友情の枠組みから自由にし、「余」がそれとなく語っているもう一つの物語を取り出すために、テキストが想定する二通りの読者がいることを指摘した。さらに、このテキストが書かれている時点での「余」と墓前で出会った女との関係を考察することで、友情の物語と葛藤するもう一つの物語を引き出すことができた。

第三章 渾名のゆくえ——『坊っちゃん』①——

語り手の「おれ」の付けた渾名はどのように発生し、誰と共有され、どのように機能するのかを、「おれ」が清に書いた手紙、他人に渾名を付けることを禁じた清の返事、最後まで書かれることがない「おれ」から清への第二信の三つの手紙から検討した。その結果明らかとなったのは、第一に、「おれ」が中学教師たちに付ける渾名は、他の初期小説に見られる登場人物への敬称付けと同様、語り手の主観の表出であること、第二に、渾名は清への手紙の中で生まれること、第三に、渾名を付けることを禁じた清の返信によって、「おれ」の渾名が初めて他者と共有されることである。

清が自分だけに知らせるように忠告していた渾名を、「おれ」は清に見立てた萩野の御婆さんと共有してしまい、ここから渾名は宛先をずらしながら共有されていく。ずらされた渾名の宛先を、物語外に想定すれば、「おれ」の語りに寄り添いながら登場人物に渾名が付けられる瞬間や、その渾名が清や萩野の御婆さんと共有される過程を読むことができる存在として『坊っちゃん』の読者が浮かびあがる。『坊っちゃん』の読者は、登場人物とは異なる水準で「おれ」の付けた渾名を共有できるのであり、読者は「おれ」にとっての「片破れ」としての清、清の代理としての萩野の御婆さん同様、渾名の第三の宛先になることが明らかとなった。

第四章 渾名が生み出す〈漱石神話〉——『坊っちゃん』②——

第三章で論じた渾名の問題を、受容の側面から捉えなおした。漱石は生前、作中人物のモデル探しを意識してのことだろうが、『坊っちゃん』の登場人物について「皆空想的の人間」

であり、「一々実在のものと認める」ことを拒むような発言をしている。しかし、この発言は、彼の死後に、彼が生前身近に接した人々によって次々と裏切られることになる。本章ではまず、登場人物のモデルを探し出して『坊っちゃん』あるいは漱石を論じるというスタイルの言説が、漱石の没後から昭和のはじめにかけての『坊っちゃん』論の典型になってゆくことを指摘した。

これらの言説を検討することで、漱石と直に接した者たちが、登場人物のモデルを指摘することによって自らを一般の読者と差異化し、特権化するという構図が浮かび上がった。この構図から『坊っちゃん』の受容を考えることで、登場人物のモデルを指摘する教え子や知人たちが一般読者の謎に答えを与えるように振る舞い、作中ではそうと名指しされていない松山や松山中学、そしてそこで働いていた実在の教師たちを『坊っちゃん』のモデルとして固定化していく過程が明らかとなった。

〈漱石神話〉の形成には、後期の小説が大きな役割を果たしたと理解される傾向にあるが、これまで〈漱石神話〉の形成に重要な役割を果たしているとは考えられて来なかった『坊っちゃん』の受容の変遷を手がかりとして、〈漱石神話〉形成の初期段階の一面面を示すことができた。

第五章 表層としての「非人情」・深層としての「人情」——『草枕』——

『草枕』の語りの表層と深層について考察した。語りの表層と深層についての問題は、「余」の標榜する「非人情」の態度が徹底されているのかいないのか、という問題として現れる。また、末尾で那美の顔に「憐れ」を見出し、「胸中の画面」が完成したとする「余」にとつて、その心境は「人情」だったのか「非人情」だったのか、という問題としても現れる。さらに、なぜ「余」は「非人情」を標榜する旅に出たのかという問題としても現れる。その理由を「余」はとどころでほめかすのだが、最後まで明確に語ることはない。

右の三つの問題の結節点となるのが、「余」の語る小説観である。小説は「初」から「仕舞迄」読むものではないという「余」の小説観に従う限り、「非人情」としての「余」の語りの表層しか紡ぎ出すことができないが、「初」から「仕舞迄」読めば「人情」としての語りの深層、つまり那美への想いが物語化されることを指摘したことで、「余」の小説観は語りの深層を覆い隠すはたらきをしていることが明らかとなった。

さらに、「那美さん」という呼び方を検討することで、「余」は物語を語っている現在、「非人情」を放棄しているのではないかという解釈を提出した。語り手としての「余」と、「余」

が語る「余」、つまり登場人物としての「余」とでは、那美の呼び方が違い、語り手としての「余」が「那美さん」と言い、登場人物としての「余」が「さん」を付けないのは、登場人物としての「余」は「非人情」と「人情」の葛藤の中にあるが、語り手としての「余」は、語っている時点で「非人情」を放棄しているからであると論じた。

第二部 初期小説における「作者」の登場と消失

第二部では、漱石における一人称小説から三人称小説への転換はどのようになされたのかを、「作者」を自称する語り手の登場と消失を追うことで明らかにした。第十章では、本論文が初期小説とは位置付けていない『それから』と『門』も論じているが、それは、一人称小説から三人称小説に引き継がれた特徴が『三四郎』までは見られ、『それから』、『門』では見られなくなること示すことによつて、初期小説とそれ以降の小説の境界を明確にするためである。

第六章 「一人坊っち」ということ——『野分』——

これまで白井道也が高柳周作を感化するという〈教育〉の物語として読まれてきた『野分』が、なぜ〈教育〉の物語として読まれてしまうのかを、「作者」を名乗る語り手と、語り手が登場人物に付ける「先生」や「君」という敬称について分析することで明らかにした。

一人称小説の語り手がそうであったように、三人称小説『野分』の語り手「作者」は、登場人物の敬称を使い分ける。白井道也に付けられる「先生」、高柳周作に付けられる「君」という敬称には、『野分』を白井道也「先生」が高柳周作「君」を感化する物語として読ませるコード化の機能があることを指摘した。

さらに、道也と高柳の孤独の内実を検討することで、孤独を自らが理想とする道を実現するために肯定的に受け入れている道也と、世間によつて孤独であることを強いられていると考え、その孤独から逃れようともがく高柳は、孤独に対する捉え方が違っていることを示し、『野分』は従来言われてきたような師弟関係を描いたものではなく、「一人坊っち」としての孤独から逃れようとする高柳の行動が、よりいっそう彼の孤独を際立たせてしまうという、孤独についての逆説を描いた小説であると論じた。

第七章 「作者」と藤尾の死——『虞美人草』——

甲野藤尾が死ぬ十八章と十九章の間の空白を問題化し、この空白、「作者」という語り手、

そして「作者」に敬称を付けて語られる登場人物の関わりを考察した。

「作者」が語らない十八章、十九章間の空白が、藤尾の死が、誰によって、何によってもたらされたのかというさまざまな解釈がなされる要因になっているが、さまざまに意味付けられることで、かえって藤尾の死はあいまいなままにってしまう。本章は、この藤尾の死を再検討する試みである。

そのために着目するのが、『野分』同様、「作者」を自称して登場人物に敬称を付けて語る語り手である。この「作者」を、生身の作者とは異なる、『虞美人草』の表現の特質として捉え、「作者」と、「作者」に敬称を付けて語られる登場人物の関係を検討することで、『虞美人草』の語りの構造を明らかにした。甲野、宗近、小野に敬称を付ける「作者」は、そのことによって自らと男性登場人物の親密性を演出するが、「作者」と男性登場人物とは持つている情報の質に違いがあるために、両者は相互補完的な関係を形作っていることを指摘し、このことから改めて十八、十九章間の空白を検討することで、多くの解釈を誘発してきたこの空白は、藤尾の死を甲野の言葉で事後的に意味付けるために用意されたのだと論じた。

第八章 「小説」と「事実」——『坑夫』——

『虞美人草』と『三四郎』の間に書かれた、一人称小説『坑夫』を論じた。「自分」と称する語り手は、『坑夫』を「小説」ではなく「事実」であると規定する。「自分」は、坑山での見聞を語るが、坑山の様子や坑夫の描かれ方に、同時代に流通した坑山や坑夫の表象が影響を与えているのではないかという問いから出発し、『坑夫』の新聞連載の前年に起きた足尾銅山での暴動事件についての新聞報道や、同時代の足尾銅山についての探訪記における銅山や坑夫たちのイメージを比較検討することで、『坑夫』とは同時代の報道や探訪記などの「事実」についての言説を巧みに取り入れながら、自らの「事実」性を確保した「小説」なのだと論じた。

ただし、その「事実」は、『坑夫』を書いている現在から「永年」を隔てた過去を回想するというテキストの性格ゆえに、書いている過程で記憶の再構成が行われたうえで成立したものであるはずだ。そこで、暴動事件を伝える新聞や雑誌における坑夫の表象が『坑夫』の中で反復しているのは、『坑夫』が書き始められたきっかけこそが、暴動事件の報道だったからではないかと指摘し、『坑夫』を書く過程、つまり語り手の記憶が再構成される過程で明治二〇年代に探訪記で流通した銅山内部の様子や坑夫像が介入し、『坑夫』でそれらが

反復されることにより、『坑夫』は「事実」性を有するに至ったのだと論じた。

第九章 「生きて居るとしか思へぬ」主人公——『三四郎』——

漱石の「田山花袋君に答ふ」(『国民新聞』明治四一・一一・七)は、当時連載中の『三四郎』を批判した花袋の「評論の評論」(『趣味』明治四一・一一)への反論として書かれたものである。この漱石と花袋の論争は、『三四郎』連載中に起きているにもかかわらず、『三四郎』との具体的な関わりは、これまで十分に検討されてきたとはいえない。まず、「評論の評論」から浮かび上がるこの時期の花袋の方法を確認し、花袋が連載中だった『三四郎』をどのあたりまで読んだうえで批判したのかを推定した。さらに、「田山花袋君に答ふ」に表れた漱石の方法を検討し、漱石が『三四郎』で試みた方法は、花袋のような読者からは批判され、また別の読者からは好意的に読まれたことを指摘した。

漱石は、「田山花袋君に答ふ」の中の言葉で言えば「生きて居るとしか思へぬ人間や、自然としか思へぬ脚色を拵へる」実践として『三四郎』を書いていたと考えられる。花袋が不満を抱いたと推測される物語序盤の、三四郎の他の登場人物との出会い方は、漱石からすれば「生きて居るとしか思へぬ人間」を描く実践であり、そのような三四郎の出会い方を支えているのが、登場人物への敬称付けであると論じた。語り手が独自の呼び方である「野々宮君」を五章以降やめ、登場人物と同じく「野々宮さん」と呼ぶようになることと、三四郎の上京後の人間関係が形成されて登場人物の間で野々宮が話題になる機会が増えることは並行しているのである。登場人物の敬称とその変化が、三四郎と語り手の視点をあいまいにする効果を生み、三四郎の出会い方をより自然に見せているのだ。以上の考察によって、『三四郎』がこの時期の漱石の方法をはっきりと示す小説だったことが明らかとなった。

第十章 漱石文学における「作者」の消失とその後——いわゆる前期三部作を中心に——

いわゆる前期三部作としてひとまとめにされてきた『三四郎』と『それから』、『門』の表現上の違いについて論じた。『吾輩は猫である』に始まる一人称小説の特徴を引き継いでいる『野分』、『虞美人草』の語り手「作者」は、登場人物に敬称を付けて語り、その敬称は登場人物への共感を表していたが、続く『三四郎』の語り手は「作者」を名乗らない。しかし、例えば野々宮に「君」と「さん」という二通りの敬称が付けられており、「君」は語り手独自の呼び方であることからわかるように、語り手は、野々宮を「君」付けて呼ぶ位置にいる。『三四郎』の地の文での敬称には語り手の位置が現われており、『虞美人草』までの小説に

見られた語り手の主観の表出としての敬称の効果は、『三四郎』にも残っていることを明らかにした。

『それから』では、『三四郎』までの小説同様、地の文に敬称が見られるが、その敬称は登場人物の発話や内言の引用であることが明示されている場合に使われている。『門』でも、登場人物への敬称は引用符の中か、引用符の中でなくても登場人物の発話であることを明示している場合に限られ、敬称の使用が整然と行われている。そして、『それから』、『門』での、「作者」と密接不可分な地の文での敬称の消失がもたらすのは、『野分』、『虞美人草』、『三四郎』に見られた、「作者」が情報を提示しないことによって生じ、さまざまな解釈を呼び込む空白の消滅だったのだと論じた。

以上の考察を通して、『三四郎』と『それから』、『門』との間には、明確な違いがあり、『吾輩は猫である』から『三四郎』までを初期小説としてひとつにまとめることの妥当性を示すことができた。

終章

本論文全体の総括として、各章で論じてきた問題の整理を行った。また、それぞれの小説についての本論文の成果を、章ごとに示した。さらに、本論文全体を通して、漱石における初期の範囲が明確になったことを強調した。従来、多くの論者が関心を持ってきたとは言い難い登場人物に付けられる敬称や、ともすれば軽視されがちな一人称小説から三人称小説への移行期に現れた「作者」という語り手、個別の小説の問題として扱われる傾向にあった物語中の空白などを、前後の小説と関わり合わせて論じたことによって、『吾輩は猫である』から『三四郎』までの小説は、初期小説としてひとつにまとめるのがふさわしいことを提示できた。